

Glocal Tenri



11

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.11 November 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- 巻頭言
聖地におけるミニ巡礼
／井上 昭洋 1
- 天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」
(14)
ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相③
／加藤 匡人 2
- 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (22)
戦後の台湾伝道庁復興に向けた動き
／山西 弘朗 3
- イスラームから見た世界 (31)
世界神学とは①—W・C・スミスの宗教論から
／澤井 真 4
- コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播— (最終回)
8. コロンビアへ！教えの伝播2 「トゥマコと天理青年」
／清水 直太郎 5
- 天理参考館から (37)
出雲人形と初瀬流れ
／幡鎌 真理 6
- ブラジルの宗教的風景 (新連載)
ブラジルの宗教と移民①
／中西 光一 7
- おやさと研究所ニュース 8
日本宗教学会第 83 回学術大会が天理大学で開催／第 370 回研究報告会 (9 月 25 日)／連載執筆のねらいと執筆者紹介

巻頭言

聖地におけるミニ巡礼

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

宗教にはそれぞれ聖地がある。キリスト教であればエルサレム、イスラームであればメッカ、仏教であればブッダガヤという名前が思い浮かぶだろう。信仰者にとって神聖視される場所が聖地であるが、山や滝、巨石や巨木といった自然物が神聖視され、その場所が聖地となることもあれば、特定の神、教祖、聖人にゆかりのある場所が聖地となることもある。また、聖地を訪れることを巡礼と呼ぶ。巡礼には、日本の四国八十八カ所巡礼(四国遍路)のように、長距離を徒歩で移動して複数の聖地を巡る回遊型の巡礼もあれば、エルサレムやメッカなど、一つの聖地を目指す往復型の巡礼もある。

巡礼の到達点である聖地では、その領域内でさらに幾つかの訪れるべき場所を巡る回遊型のミニ巡礼がなされることがある。エルサレムを訪れるキリスト教徒であれば、その最終目的の場所は聖墳墓教会であり、聖堂内のイエスの墓ということになるだろう。同地には「ヴィア・ドロローサ(悲しみの道)」と呼ばれる道があり、伝承に基づいて 14 のステーションが指定されていて、人々は順を追ってイエスにゆかりのある各ステーションを巡る(この行為もヴィア・ドロローサと呼ばれる)。イエスのゴルゴダの丘までの苦難の道りを辿るミニ巡礼が聖地エルサレムの中で行われるわけである。

一方、メッカであれば、巡礼者はマスジド・ハラーム(「メッカの大モスク」)の中心にあるカバ神殿の周りを反時計回りに 7 回まわり、次にモスク内にあるサファーとマルワという 2 つの小さな丘の間を 7 往復する。この 2 つの丘の間の往復(「サアイ」と呼ばれる儀式)は、アブラハムによって荒野に追われたハガル・イシュマエル母子の苦難を追体験するものとされる。また、仏教徒にとっての聖地の一つであるブッダガヤのマハーボーディ寺院の境内には釈迦が悟りを開いたとされる場所に菩提樹の聖木と金剛宝座があり、訪れた人は本堂

参拝後に本堂裏にある菩提樹と金剛宝座に足を運ぶ。金剛宝座は、釈迦が悟りを開いた時に座っていた場所にアショカ王によって置かれたとされる石盤である。とある事件が起こって以降、柵で囲まれて近づくことができなくなった。

巡礼は聖地を訪れ、そこで祈りを捧げることが目的である。一方、到達した聖地において行われるこれらのミニ巡礼の多くは、その宗教にとって重要な出来事を追体験する作業であり、祈りとは異なる角度から巡礼者の信仰を強化するものと言える。たとえその場所で一時の祈りを捧げるにしても、「ヴィア・ドロローサ」であれば、それはイエスの苦難に思いを馳せる儀式であり、「サアイ」であれば、息子のために必死に水を探し回った母を神が泉の場所にいざなったことを想起させる儀式であり、菩提樹の聖木の下で経を唱え、瞑想する行為は、釈迦の悟りに自らの信仰を重ねる行為である。聖地を目指す巡礼であれ、聖地内で行われるミニ巡礼であれ、巡礼の過程で人々は種々の経験をし、自らの信仰を振り返るのである。

ところで、天理教のおぢばがえりでは、どのようなミニ巡礼が行われるだろうか。まず、神殿、教祖殿、祖霊殿の三殿を巡る参拝が考えられる。その他の訪れる場所として天理教記念建物や豊田山のお墓を挙げるができるかもしれない。この 2 つの場所については、別の機会に触れることができればと思う。三殿参拝について考えると、回廊を歩いて各社殿を巡拝する行為は回遊型のミニ巡礼と言える。それは、神殿で参拝した後にその場から教祖殿と祖霊殿に向かって礼拝する行為とは異なるものだ。その点については別稿で言及しているので、参照されたい。

〔註〕

井上昭洋(2013)『『おぢば帰り』の巡礼論』『現代社会と天理教《伝道参考シリーズ XXIV》』pp.167-183.

ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相③

ヨーロッパ拠点設置の動き

鎌田親彦がフランス留学に出発してから4年後の1968年、天理教教会本部の海外布教伝道部（以下、「伝道部」）にて、パリに布教拠点を設置する動きが本格化する。奇しくも、この年は天理教青年会50周年記念事業として、「あらしとよりよう号車ユーラシア大陸巡回」が実施された年にあたり、「論達第二号」発布以降の海外布教推進の流れの中でも節目となる年にあたる。

以前に、山名大教会の諸井慶徳には、パリをヨーロッパ布教の足がかりにしたいという思いがあったことを紹介した。では、教会本部がパリに目を向けたのはなぜであろうか。

『天理教パリ出張所20年史』を紐解くと、二つの理由が書かれている。一つは、当時教勢が伸びていたコンゴブラザビル教会への中継地点としての意義、もう一つはヨーロッパにおける交通、文化の中心地との認識である（天理教ヨーロッパ出張所1992:12）。これを裏付けるものとして、伝道部の「昭和44年度活動案」（1968年12月19日付）の中に、「ヨーロッパ布教の足がかりとして、又アフリカへの中継基地の意味をかねて、パリに拠点を開設したい」という記述がある。このように、教会本部としてパリを選んだ理由は、諸井慶徳が持っていた想いと大きく重なっていたことが分かる。なお、この「活動案」では、ヨーロッパに限らず、伝道部が管轄する各地域についての方針が記述されており、海外布教推進の構想の一環としてパリの拠点設置の動きが計画されていたことが窺える。

具体的な設置までの動きについては『20年史』では記述が限られているが、鎌田が伝道部と当時やり取りをした書簡を合わせて見ると、おおまかな流れを辿ることができる（以下で引用する書簡は、鎌田親彦からの提供による）。

まず、1968年6月11日付で、伝道部のヨーロッパ課長であった深谷善和から鎌田に送られた書簡を見ると、鎌田から物件購入に関する資料がその書簡に先立って伝道部に送られており、その資料を伝道部内で検討した結果、実際に現地で見ないと判断できないとしつつ、「マンションよりは一軒建ちのものが良い」というのが伝道部の「大体の意見」であると述べられている。そして拠点設置の費用を翌年度（1969年）の予算に組み込むためには、1968年の秋には「はっきりした方向を持って、予算の検討に入らねば」ならないと記載されている。その後、同年8月には伝道部の清水国雄次長が来欧している（天理教ヨーロッパ出張所1992:11）。そして、その後伝道部と交わされた一連の書簡では、鎌田と田中健三が活動を進めるための一助として、自動車を購入する資金を関係者の間で募り、最終的にまとまった資金が送金されたと記載されている（1968年6月11日付、7月8日付、11月15日付、12月3日付書簡）。

そして、1968年の年末も近い頃になると、新しくヨーロッパ課長に任命された紺谷久則からの書簡の中で、布教拠点設置の具体的な構想が明らかになる（1968年12月15日付書簡）。その書簡では、「巴里布教基地の設置と将来の見通しに就いて」という見出しに続いて、「㉔基地の位置」、「㉕基地の土地建物」、

「㉖基地の買収方法」、「㉗基地の使用方法和将来の見通し」という項目が列挙されている。

まず、「㉔基地の位置」については、当時日本からの飛行機の発着点であったオルリー空港の近くであることと、パリの公共交通機関とのアクセスの良い沿線が望ましいと書かれている。次に、「㉕基地の土地建物」については、将来的に神殿を建築できる余裕があることと、朝夕のおつとめが支障なくできるように一戸建ての建物が望ましいと書かれている。さらに、物件内の部屋割りについてもすでに構想があり、①サロン（リビングルーム）に神様をお祀りすること、②文化交流センターとしても位置づけること、日本に関する書籍を集めた図書室を設けること、③布教師、留学生、教内旅行者の宿舎としての役割を持たせること、④拠点の管理者の部屋を設けること、の4点が書かれている。

そして「㉖基地の買収方法」では、買収の際に不手際が生じないように、追加の支払いが生じても公証人の立ち合いを求めた方が望ましいこと、そして地主とのトラブルや永続的な賃貸料の支払いを避けるためにも、借家ではなく購入が望ましいことが記されている。最後の「㉗基地の使用方法和将来の見通し」では、毎年1名か2名の布教師を布教もしくは留学目的で住ませ、そこで語学の上達と布教の成果を目指すこと、それにあたり、最低3年以上の住み込みを保障し、ゆくゆくは布教所または教会の設置を促進するのを目的とすることが記されている。そして書簡の最後には、「土地建物買収費」を含めた「基地費」という名目で暫定予算額が示されている。

しかし、実際にヨーロッパ課に充てられる予算はそれを大きく下回る額となったため、その資金に予算を上乗せしたものを物件購入の頭金とし、10年計画でローンを支払うという伝道部の案が紺谷から伝えられる（1969年3月4日付書簡）。しかし、1969年9月に紺谷が物件購入のため来仏した頃には、仏貨切り下げ、金融引き締め政策に加え、種々の銀行法等の改正が施行されたことから、伝道部の予算では想定していた規模の物件が購入できないことが判明し、紺谷が滞在中に鎌田と田中の連名で畑林清次部長宛に書簡を出し、予算額の再検討を陳情している（1969年9月17日付書簡、鎌田2013）。そして、最終的には増額した予算が確保され、同年11月19日に紺谷の名義でパリ南郊のアントニー市の27, rue de la Cité Moderneに物件を購入した（鎌田2013、天理教ヨーロッパ出張所1992:12、161）。同拠点は、1971年6月1日の常話会議で、天理教海外布教伝道部パリ出張所（LE CENTRE DE LA MISSION TENRIKYO A PARIS、フランス語表記は原文ママ）と命名されることとなる（「出張所・連絡所に関する答申案」1988年1月7日）。

[引用文献]

鎌田親彦「天理日仏文化協会創設の経緯」天理日仏文化協会関係者の集い講演原稿、2013年10月25日。

天理教ヨーロッパ出張所編『天理教パリ出張所20年史』天理教ヨーロッパ出張所、1992年。

戦後の台湾伝道庁復興に向けた動き

戦後台湾における天理教の変容

前回(9月号)までは2回にわたって戦後台湾における天理教の変容について、現地人信者が特に多かった山名大教会に所属する嘉義東門教会と斗六教会の状況について紹介した。第2次世界大戦の敗戦により、日本は台湾の領土を失った。そして新たに統治することになった中華民国(中国国民党)は、日中戦争で戦った敵国日本の影響を台湾社会から一掃する政策を取った。この対策として現地人信者たちは神像や香炉などを設置し、漢人民間信仰の廟のようにカムフラージュして、官憲による弾圧を避けようとした。

特に斗六教会に所属していた元布教所は、当時唯一合法的な組織として認められていた中国仏教会という仏教団体に所属することで、なんとか布教所として存続しようとした。このことは、すでに指摘したように嘉義東門教会があった嘉義市と斗六教会の元布教所があった雲林県とは、天理教に対する態度に大きな違いがあったことによる。戦後の台湾社会を理解するためには、二・二八事件と戒厳令について説明する必要がある。

二・二八事件と戒厳令

二・二八事件とは、1947(昭和22)年2月28日に台北市で発生し、その後台湾全土に広がった国民党政府による長期的な白色テロ、すなわち民衆への弾圧・虐殺の引き金となった事件である。

この事件は、前日の2月27日に、台北市内でタバコを販売していた台湾人女性に対し、取締の役人が暴行を加えたことが発端である。翌28日には台湾人による市庁舎への抗議デモが行われた。憲兵隊がこれに発砲したことで、抗争はたちまち台湾全土に広がることとなった。台湾人は多くの地域で一時的には実権を掌握したが、政府は中国本土から援軍を派遣し、武力によりこれを徹底的に鎮圧した。そしてこの事件で発令された戒厳令は台湾省政府の設立によりいったん解除されたが、1949(昭和24)年5月19日に改めて発令され、1987(昭和62)年まで38年もの長い間続けられることになった。この間、政治活動や言論の自由は厳しく制限され、政治・思想犯の投獄や処刑などにより、厳しい恐怖政治が続いた。

また、この事件をきっかけに日本統治を経験している「本省人」と戦後に中国大陸から中国国民党とともに渡ってきた「外省人」の間に亀裂が入り、その関係に深い溝を生じさせた。このことが、本省人の日本色を一掃することが外省人による国民党政府によって推し進められる背景ともなった。

台湾伝道庁復興に向けた動き

このような厳しい社会状況の中でも、台湾の天理教信者たちは信仰を続け、つとめやさづけによる布教活動が展開されていた。

天理教教会本部では長く続いた戦争が終わったことで、官憲による弾圧もなくなり、終戦後すぐに教祖の教え通りの姿に天理教を戻そうという「復元」が2代真柱中山正善によって進められ、教義書である「天理教教典」は、戦前のいわゆる「明治教典」から現在の「教典」へと大きな転換が行われていた。しかし当時は、日本と台湾は人的往来はもとより、郵便物なども台湾では検閲されることから、このような大きな転換を知らせる方法もほとんどなかった。

天理教にとっては、教会本部がある「ぢば」が人類救済の根本であり、全人類のふるさとであるという考えから、「おぢばがえり」が重要な信仰実践であるのは言うまでもない。それにとどまらず、

「おさづけの理」は「ぢば」で教理の話を9回繰り返して聞くことで戴くことができることから、おぢばがえりは信仰を实践する上で不可欠なのである。戦後台湾の天理教にとっては、戒厳令下でも取締を恐れずに布教活動ができるための政府による「教団の公認」と、日本と台湾の間で人的往来ができる「渡航の自由」の実現という2つのことが、重要な課題となっていたのである。

教会本部としてまず取りかかるべきは、戦後も組織体制の上では戦後も存在し続けている「台湾伝道庁」をどのように再び台湾の地で設置し、台湾伝道を復興させる中心となる人物を庁長として赴任させるかが急務となった。そこで1967(昭和42)年1月26日のお運びで、台湾伝道庁の8代庁長として本部青年であった三濱善朗が任命された。三濱庁長がまず取りかかったのは、布教目的で渡台するためのビザの取得であった。

2代真柱は1960(昭和35)年に海外巡教の帰路、台北にある松山空港に立ち寄り、また1963(昭和38)年にも海外巡教の帰路に台湾を訪問している。1960年に松山空港に立ち寄った際の感想を、2代真柱は次のように記している。

パスポートを取りあげられての外出など、すでに台湾は、外国となったのだとの感じを強くしました。しかし、休憩室近くに、十数名の人々が、手を振って迎えていてくれるではありませんか。`おお高!、とまず睦信が声を出しました。彼と天理中学校で同窓だった高万益君が迎えてくれているのです。`私は劉義人です。語学校卒業です、と名のりをあげました。柔道部にいた劉君で、数年前天理大学の柔道部を招聘したその契機をつくった人です。私の通過を知り、わずか垣根越しの逢瀬をもとめ、嘉義やその他の遠路を、はるばる訪ねて来てくれた人々なのです。涙の出る思いは、彼我ともに同じであります。`早く伝道庁を置いてください、`私たちの子供が、おぢばの学校で学べるようにしてください、と異口同音に申されました。`骨を折りましょう、としか答えられない私の心情はいかがであったでしょう。(中山正善『北報南告』天理教道友社、1960年、212～214頁)

さらに1963年の台湾訪問には、随行した高橋道男海外伝道部長は、次のように記している。

木村大使の案内で総統府に秘書長張群氏を、続いて自宅に何応欽將軍を訪問する。御兩人共知日親日の巨頭で、張氏は現に蔣総統の下にあって実力を持つ人である。併し、共に基督教徒で、日本語を好くするが、天理教については知る所がない。夫々快く会談し、教典、要覧等書籍を献ずることとする。張氏から、何か希望があればというので、真柱様から台湾に熱心な信者が相当数あって、日本から指導者を求めているので、適当な者の入台が出来ることを要望したいと申入れられる。まことに勿体ないことである。(高橋道男「海外巡教見聞記」『みちのとも』1963年12月号、74頁)

こうした記述からも、2代真柱が、戦後自由に布教活動もできず、おぢばがえりすらできない台湾の信者の切実な願いを受けて、台湾伝道庁を復興するために庁長を赴任させたいという強い思いを有していたことが窺われるのである。

「世界神学」としての天理教学

近年、「世界哲学」「世界歴史」「グローバル・ヒストリー」などの語が、人文社会学におけるある種のトレンドとなっている。また、ユヴァル・ノア・ハラリの『サビエンス全史』(A Brief History of Humankind, 日本語では2巻本で出版)は、地球誕生から人類史を捉える書物として日本でも人気を博している。物事を地球規模で見直そうという試みについては、それが真に成功しているかはともかく意義ある試みであろう。

「陽気ぐらし」や「世界たすけ」を目指す天理教は、こうした言葉を掲げている以上、地球規模・世界レベルで物事を捉える視野が必要である。「論達第四号」(立教185年[2022]10月発布)と同月に発行された『みちのとも』では、「教学研究の扉」というシリーズが始まった。その〈第一考〉は、橋本武人「元初まりの話 人類の未来へ向けての『救済の歴史』」であった。元初まりの話は、親神天理王命による人間世界創造のプロセスが記されている。人間の成人を守護し文化の発達へ導いていくなかで、陽気ぐらし世界を進めていくうえで人間の本来のあり方が教えられている。橋本の論稿は、親神による人間の「救済の歴史」として元初まりの話を考察しており、「世界神学」としての天理教学の位置づけを論じようとしたという意味で、高く評価されるべきである。

これまで、天理教が現代世界のなかで果たす役割について、天理教内でも盛んに論じられてきた。これらの議論は、おそらく例外なく現代的状況を踏まえたものとなっているだろう。変化しない宗教は存在しない。いずれも時代に呼応しながら変化していくものである。同時に、これまで「世界宗教」(World Religion)と呼ばれてきた三大宗教—仏教・キリスト教・イスラーム—では、時代や地域に応じて変化する神学体系を有してきた。言い換えれば、これらの諸宗教が「世界宗教」と認知されるのは、(布教相手の文化を含む)諸環境に対応する教えを、教えの源となる聖典から汲み上げてきた結果として、現在(いま)を生きるうえで糧となる教えを、多くの人々に与えてきたからである。

教えを広め救済を進めるのを人間の身体で喩えるならば、身長が伸びるなかで身体を支えるには背骨の成長が不可欠である。天理教の文脈で言えば、教えの伸展を考えるうえで天理教学という背骨が伸びていく必要があるのではないだろうか。

W・C・スミスとは

世界を意識した神学の構築について考察するために、2回に分けてW・C・スミス(Wilfred C. Smith, 1916～2000)の「世界神学」についての議論を取り上げたい。スミスは20世紀を代表する宗教学者の一人である。また、日本を代表するイスラーム研究者であった井筒俊彦(1914～1993)をカナダのマギル大学へ招聘した人物でもある。そして、ハーバード大学世界宗教研究所を創設したりと、「宗教」をめぐる学問的状況の中心にいた人物である。1984年には、天理で開催された国際会議に参加するために天理を訪れた。

スミスはイスラームを長らく研究してきたが、日本語では『宗教の意味と終極』(The Meaning and End of Religion, 1963)や『現代イスラームの歴史』(Islam in Modern History, 1967)、そして

『世界神学をめざして—信仰と宗教学の対話』(Towards a World Theology: Faith and the Comparative History of Religion, 1981)が翻訳されている。同時代を生きたM・エリアーデ(Mircea Eliade, 1907～1986)は20世紀後半の宗教学を席捲し、日本の多くの研究者にももてはやされた。しかしながら、エリアーデの宗教学説には、1990年代以降に批判の嵐が吹いた。スミスの宗教学説はいわゆる「エリアーデ・ブーム」の陰に隠れ、日本の宗教学者たちには理解されてきたとは言えなかった。エリアーデ批判の裏返しでもあった「宗教」概念再考のなかで、スミスの議論は「宗教」概念再考についての議論を牽引したT・アサドやR・T・マッカヨンらによって評価された。こうした影響からか、先に挙げた邦訳書が2020年以降に2冊出版されて、スミス理解も少しずつ進みつつある。しかしながら、スミスの議論は彼の「宗教」論を含めて難解な点も多く、「宗教」を「〇〇教」のような宗教教団として捉える傾向にある人々に誤解されてきたように思われる。

宗教か信仰か

『世界神学をめざして』の副題は、「Faith and the Comparative History of Religion」と書かれている。日本語で直訳すると「信仰と比較宗教史」となるだろうか。「宗教学」という学問をどのように表現するかについて、研究者によってその表記は異なる。天理大学宗教学科の名称では「Religious Studies」が用いられているが、来年度にポーランドで開催される国際宗教学宗教学史学会(International Association for the History of Religions, IAHR)では、「History of Religions」となっている。また、宗教学は「比較宗教学」(Comparative Study of Religion, Comparative Religion)とも呼ばれてきたが、この表現は宗教学が宗教の比較研究を通してなされるという理解に基づいている。

このように、各自の「宗教」理解を表現している表記であるが、スミスは単数の「宗教」で表記してきた。この理解の背景に、彼の「宗教」理解が介在している。彼は『宗教の意味と終極』のなかで、「宗教」という表現よりも「信仰」や「伝統」という表現を用いて宗教を理解するべきであると論じている。私たちは信仰に対する向き合い方がそれぞれ異なる。言い換えれば、各自が異なった信仰の輪郭を有しているとも言うことができる。このことは、「信仰は一名一人」としばしば表現されてきたところからも理解できよう。

スミスによれば、私たち各人の「信仰」が累積的に積み重なった結果として、私たちが認識する宗教教団があるという。同じキリスト教を信じていても、時代や場所で信仰者の理解が異なってきたことは言うまでもない。歴史的に、先人の信仰の上に私の神への信仰があり、その上に子や孫の世代に信仰が積み上げられていく。積み上げられた伝統のなかに私たちは立ち、信仰している。私たちが「宗教」と言ったとき、一人として同じ宗教の理解はない。あるのは誰かの「信仰」であり、その重なりとしての伝統である。それまでの伝統の上に立ちつつ、時代や状況のなかで新たな伝統が積み重なっていく。私たちの信仰は固定化された何かではなく、私たち自身の状況に応じて絶えず捉えなおされるのである。

[参考文献]

橋本武人「元初まりの話 人類の未来へ向けての『救済の歴史』」『みちのとも』(立教185年10月号)、2022年、22～29頁。

8. コロンビアへ！ 教えの伝播 2 「トゥマコと天理青年」

元天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

前回（9月号）の「教えの伝播 1」では、栽培されたバナナに焦点を合わせ、土地所「トゥマコ」をテーマとした。それを受けて今回は、「なぜ天理青年を派遣したのか」について資料から探りたい。

太田哲三氏の『コロンビアの日々』によれば、在コロンビア駐日大使の土屋氏は、日本とコロンビアの国交が回復し、移住を進めていた矢先に、トゥマコのバナナ事業のための出資者や人材を探していた。その結果、「1960年（昭和35年）、市村清氏が出資者となり、実際に移住する若者を募ることになって、その話が天理教に持ち込まれ、これを受けて、二代真柱様は、天理高校2部の農事部の生徒から希望者を募ることになった。」⁽¹⁾

この文章の中で、「その話が天理教に持ち込まれ…」と記述されているが、この部分が少し気になった。

第2次世界大戦後、1954年（昭和29年）日本はコロンビア共和国と国交を回復した。当時、東京にあった「共栄貿易会社」の社長富谷政明氏は「コロンビアの国交が回復されるや、直ちにコロンビアのコーヒー云々」とある部分、そしてこの富谷氏が「具体的なバナナ園開拓（日本人移住）計画をたてた」という部分は、久保俣之前コロンビア出張所理事長の資料「コロンビア50年伝道史1」から前回引用した。この資料にはまた、次のように記されている。

このような計画を元にして、日本側の出資者並びに独身青年の物色を始めた。当時コロンビア大使館に赴任していた松野臨時大使と相談の結果、出資者には、旧知であった三菱石油会社（リコー社長）の市村清氏に依頼することにし、早速市村氏に交渉したところ快諾を得たのが5月24日であった。また、開拓に要する独身青年については、着任早々の土屋隼大使と相談したところ、同大使が懇意にしていた天理教の中山正善二代真柱に依頼してはどうかということになり、富谷氏は直ちに共同経営者のレオン・ノーベル氏を同道して上記の市村清氏並びに天理教の二代真柱を訪問し、事業についての説明を行った。時は1960年7月の中頃であった。⁽²⁾

この文章中にある「同大使が懇意にしていた天理教の中山正善二代真柱に依頼」という部分について、2代真柱と土屋隼元コロンビア大使の接点はどこあるか、と疑問に思って調べたが、わからないままであった。しかしながら、2代真柱は東京帝大を1929年に卒業されているが、土屋氏は東北帝大を1930年に卒業している。土屋氏はその後、米国勤務など外務省一筋の人生であり、1954年～57年には在ニューヨーク日本総領事、1957年～61年の4年間コロンビア全権大使として公務している。⁽³⁾あくまでも推察の域を出ないが、同世代であり、土屋氏の外務省勤務や外交官時代に接点があったのではないと思われる。

コロンビアへの扉

コロンビアに渡った17名の「天理青年」たちは、トゥマコバナナ園開拓に命をかけたが、気候や資金などの諸事情で1963年にいずれも退職した。その中で帰国者は6名、コロンビアに残った者は11名であった。

その後、彼ら天理青年の伏せ込んだ「ものだね」が、芽を出して育ち、2代真柱をはじめ、歴代の真柱や教会本部の支援と「親心」を受けて、壮絶な且つ素晴らしいコロンビアの道が繰り返されることとなる。そうして天理教の「コロンビアの扉」が開か

れたのである。その詳細は、太田哲三初代コロンビア出張所長著『コロンビアの日々』に委ねたい。今日、3つの教会と数カ所の布教所が存在する。「天理青年」の家族を除けば、信者はほとんどコロンビア人である。

トゥマコ—有数の危険な地域

ところで、トゥマコの正式名称は「サンアドレス・デ・トゥマコ」という。湿度が高い熱帯性気候である。コロンビアの南西に位置し、エクアドルとの国境近く、ナリーニョ県の県庁所在地パストから300kmの距離がある。トゥマコは28度～35度、年間平均湿度は約85%である。人口は現在25万人ほどであるが、人種構成が他の地域と著しく異なり、メスティソ（白人＋先住民）と白人は6.1%だけだが、黒人とムラート（白人＋黒人）を合わせると88.1%、先住民は5.1%となっており、ほとんど黒人系で占められる（コロンビア全体ではメスティソが50.3%、白人が26.4%）⁽⁴⁾。

トゥマコは、通称「太平洋の真珠」と呼ばれた風光明媚な自然に囲まれた穏やかな地域だった。だが、1990年あたりから様子が劇的に変化する。コカ栽培が始まり、またゲリラ（ELN民族解放軍とFARCコロンビア革命軍）がこの地域に入り込んで、2000年ころから急激に危険地帯化する。それによりこの地域は貧困、公共施設や教育不足、徴兵、強制移動難民などの原因もあり、殺人が多発している。現在でも治安がすこぶる悪いトゥマコ地域である。

トゥマコ訪問記

バナナ園「市村農場」は、トゥマコから約50数キロ内陸に位置するEspriella（エスプリエジャ）という村からさらに少し内陸に入る。エスプリエジャは少しの商店や教会などがある集落である。2016年3月、筆者がコロンビア出張所長時、意を決してトゥマコに行った。空路ではなく、陸路だった。出張所の行事に参加していた信者の親戚がトゥマコに居住していたので、その信者と一緒に18時間超（午後7時にカリ発、トゥマコ着は翌日の午後1時半）を費やして無事到着した。当時のバナナ園農場長の富谷典明氏（86歳）⁽⁵⁾に農場跡地を案内してもらった。農場では当時のお手伝いさんの娘が同じく家政婦として、富谷さんをお世話されていた。富谷氏はここで椰子とカカオを栽培していた。

2代真柱は1961年（昭和36）と1963年（昭和38）、トゥマコを訪問されているが、宿泊された建物はすでになかった。富谷氏は「ここらへんだったね」と述懐された。コロンビアの扉が開かれたのはカリ市ではなく、2代真柱が訪ねられたこのトゥマコ、エスプリエジャだと筆者は思っている。当時の天理青年たちが実施したかどうかかわからないが、筆者はトゥマコの市街地でおさづけ（天理教の病人に対する祈り）を取り次ぎまくった。次から次と褐色の人たちが願い出てきた。終了後、なぜか涙が止まらなかった。（完）

〔註〕

- (1) 太田哲三『コロンビアの日々』（天理大学出版部、1988年）、3頁。
- (2) 久保俣之「コロンビア50年伝道史1」
- (3) <https://ja.wikipedia.org/wiki/土屋隼>
- (4) https://es.wikipedia.org/wiki/Etnografia_de_Nariño
- (5) プロモータの共栄貿易会社社長富谷政明氏の長男、メキシコ生まれ、2023年没。

はせ
出雲人形と初瀬流れ天理参考館学芸員
幡鎌 真理 Mari Hatakama

近年、異常が通常になったような気象が続く。奈良は激甚な自然災害が比較的少ない穏やかな地域と思われがちだが、そんなことはない。最初に都が定められた土地柄ゆえに災害についての古い記録は多く、『日本書紀』に書かれた水害と地震の最古の記録はいずれも奈良のものである。推古天皇7年(599)マグニチュード7.0と推定される地震が発生し、日本で最初に地震の被害状況が記録されている。そのわずか2年後の推古天皇9年(601)5月、今度は大雨による河川の氾濫で、「宮殿にまで水が流れ込んできた」という記述を『日本書紀』で確認することができる。旧暦の5月なので、現在の暦では梅雨時期にあたる洪水による浸水被害だったのだろう。

“大和豊年米食わず”ということばがある。奈良が豊作ということは、天候が順調で雨も適度に降ったことを意味するが、奈良の天候が順調ということは、すなわち他の地方は雨が多くて不順な年回りだったことを示す。逆に、他の地方が豊作ならば奈良は雨不足で、干魃の年ということになる。奈良は雨の少ない地域で、さほど大きな河川もなく、水源をため池に頼っていた。江戸時代には4～5年に一度の間隔で干魃に苦しんだ奈良の人たちは、6,000ものため池を作って備えとしたが、それらはもともと田畑だったために水深が浅く、“大和の皿池”と呼ばれて保水力が弱かった。大規模なため池を作ろうにも、複雑な入組支配の権利の問題で実現には至らなかった。最後は雨乞いしかなく、「いさめ踊り」や「なもで踊り」、「火振り」などが挙行されることになる。

一方で、大水の氾濫による水害も少なくなかった。なかでも、江戸中期に発生した「御所流れ」と江戸後期の「初瀬流れ」は被害が甚大だった。奈良で今に伝わる様々な記録でも、「大水」や「洪水」という表記は多々あるが、「流れ」と位置づけられるのはこの2つである。今回、奈良の初瀬出雲人形を調べる機会を得て、現在1軒だけ残る窯元の水野家を調査したが、売買の掛帳や人形の種類などを含む記録が一切残っていないと言われた。出雲人形といえば、「出雲人形を買って帰らんと長谷寺に参ったことにならん」と称されたぐらい長谷寺参詣の土産物として人気を博したものである。江戸時代よりさかのぼるものでもなく、文化年間の書付ぐらいありそうなものと思ったが、8代目窯元水野佳珠氏は「初瀬流れでみんな流されてしまいました。記録も人形の型も」と静かに言われた。

「初瀬流れ」は文化8年6月15日(新暦8月3日)に初瀬、現在の桜井市で発生した大洪水である。大正3年11月に奈良県八木測候所が刊行した『大和風水害報文』にも様子が詳細に記録されている。「六月十五日夜五ツ時より小雨降出し同夜八ツ時頃より一時許大雨頻に降りし為めに初瀬より奈良迄の山手は殊の外大水となり初瀬にて家三十軒流れ溺死せし者六七十人あり其外に泊込の旅客十五人溺死せり而して追分、金屋、三輪の邊は床上へ浸水し布留谷にても人家五六軒流れ丹波市村は全部床上へ浸水せり又岩屋村にても家二軒流れ櫛ノ本村にては土橋悉く流る又菩提山川の出水にて高樋村に潰家二軒と中之庄村に流家二軒あり蔵ノ庄川破堤し…」と続く。午後8時頃から降り出した雨は午前2時頃には一気に激しさを増した。短時間に大量の雨が降り、時間降水量は100ミリ程度と推測されている。このとき奈良以外には特に大きな被害の記録がないことから極めて局地的な災害となった。しかも、大雨という必ず被害が出る宮堂や吐田、窪田といった平野部は無事で、奈良盆地東縁の山間部に被害が集中したことから、

大きな川に注ぐ前に山間部で川が溢れたことが原因と考えられている。ともかく、初瀬の被害は大きく、集落全体が川のようになって死者は126名に及んだ。長谷寺の参詣者であろう「旅客十五人」も「溺死」してしまった。出雲では上半身を地上に出し、腰から下が埋まっている地蔵石仏が祀られている。「初瀬流れ」で川上から流されてきたものを地域の人が救い出したと伝えられ、「出雲の流れ地蔵」と呼ばれている。なんとも目を覆うような悲惨な出来事で、これでは何もかも流されて残されていないはずだ。水野家に伝わる最古の人形の型は「天保十四年／＼の三月吉日」と「山型にキ」の刻印が読み取れる。天保14年(1843)は卯年にあたる。「初瀬流れ」の被害は北に延びて、天理の布留では家が5、6軒流され、丹波市村では全戸床上浸水の被害となった。布留川の水位が上がったのだろう。「奈良山よりも多く出水し猿澤池の鯉多数流出せり奈良町も水押の為めに番所及び牢屋へ



図1 「天保十四年」の刻印が見える天神の人形型背面 全高14.3cm (水野氏蔵、岡下浩二氏撮影)

浸水し囚人等は山へ避難せしむ奈良三條の西方にて水の深さ八尺許あり」と記録が続くので、春日山からも鉄砲水のように大水が流れ出し、猿澤池の鯉までが流された。三条通の西では水が2m40cmの高さにまで達したところもある。浸水した牢屋から囚人を避難させるなど人道的な対処がとられていたことも記録からわかる。被害は奈良県東部の山沿いに広がった。

最後に、先に触れた出雲人形を紹介しておく。奈良県の方ならご存知だろうが、これは島根県出雲の人形ではなく、奈良県桜井市出雲に伝わる郷土人形で、現在桜井市のふるさと納税返礼品としても提供されている。「島根の出雲と紛らわしい」という理由で、好事家から「大和出雲人形」や「初瀬出雲人形」とも呼ばれる愛らしい人形である。この人形のルーツはおよそ2000年前にさかのぼる。第11代垂仁天皇の後である



図2 出雲人形の三番叟 全高14.5cm 右手で鈴を振り、左手で扇を持つ姿が軽妙なおかしみを醸し出す。(水野氏蔵、岡下浩二氏撮影)

日葉酢媛命の葬儀に際して、それまでの殉死の風習を改めて、生きた人間の代わりに土偶を埋納すべきと進言したのが出雲国から召喚された野見宿禰で、その作り手100人を出雲から呼び寄せて土偶の制作にあたらせたのがこの地であったため地名にも由来する、という壮大な故事がこの素朴な人形にはある。文字通り歴史の過酷な波に洗われて、モノは現在に伝わるのだと改めて思う。そして、言祝いで鈴を振る三番叟にあやかって、いずれの地域にも災害のないことを切に願う。

ブラジルといえば、何をイメージするだろうか。サッカーやサンバ、シュラスコを連想する人が多いだろう。地球の裏側に位置し、一見するとブラジルは遠い国のように思えるが、実際のところ、日本には数多くのブラジル人が住んでいる。出入国在留管理庁によると、在留外国人数は3,419,992人（2023年現在）で、そのうちブラジル人数は211,841人となっている。この数は、中国（821,838人）、ベトナム（565,026人）、韓国（410,156人）、フィリピン（322,046人）に次いで5番目に多いが、アジア以外の外国人数では最も多いのである。⁽¹⁾

他方、ブラジルには多くの日本人・日系人が居住しており、その歴史は明治時代にまで遡ることができる。1908年、日本人移民を乗せた第1回移民船「笠戸丸」が神戸港を出港してから、戦前に約189,000人、戦後に約68,000人の日本人が渡伯している。現在、日系人の数は150万人を超え、ブラジルは世界最大の日系人コミュニティを有している。また、ヨーロッパ（イタリア、ポルトガル、スペイン、ドイツなど）やアジア（中国と韓国）、中東（レバノンとシリア）からの移民とその子孫も住んでいるため、ブラジルには多様な人種、民族、宗教が混在している。こうしたブラジルの社会的文化的特性を踏まえ、筆者は「宗教」と「移民」をテーマに、知られざるブラジルの姿を解き明かしていきたい。

おやさと研究所におけるラテンアメリカ研究

まず、筆者が所属する天理大学おやさと研究所の設立理念とブラジル研究の意義について触れておきたい。

同研究所の前身は、昭和17年12月31日に設立された「天理教亜細亜文化研究所」であり、その第1回所員会議において、創設者の中山正善2代真柱は次のように述べている。

今になって研究所を設けたということは、如何にも時局に便乗して出来たように見えるが、この研究所のことにについては、自分としては夙に語学校の設立に於いて考えを深うし、図書館の創設に於いて、その手を染めたものと思っている。即ち、図書館の中に「日本文化研究会」を設け、語学校の中に「海外事情調査会」を設けさせ、今日まで名称や組織は違って来たが、研究の必要を痛感し、その具現を計ってきたのは全く同じ気持ちからであった。更に教庁には「海外伝道部」を設け「史料集成部」を置いて来たことも、要はこの気持ちからであった。全てが本教伝道—世界救いに邁進すべき本教伝道上の必要に応じ、その処々に必要な機関の一つとして設けて来たものであって見れば、これ等の諸機関は決して個々別々のものではなく、本質的に一連の連関性を持ったものであった。⁽³⁾

これに応じて、研究所には第1部日本文化、第2部大陸（朝鮮、満州、中国、モンゴル、インドなど）、第3部大洋（フィリピン、ニューギニア、オーストラリア、ニュージーランドなど）、第4部宗教（仏教、キリスト教、イスラム教など）の4部制が敷かれ、海外伝道に向けた調査・研究活動の土台が築かれた。その後、昭和21年に研究所の名称は「天理文化研究所」に改められたが、2代真柱の設立理念を踏襲して、「海外伝道調査班」や「海外伝道史編纂班」、「教義翻訳研究班」が編成された。当時の諸井慶徳所長は、研究所を「世界に於ける諸民族の宗教文化を研究し調査する機関」と定義し、その存在意義を明確にするとともに、外国研究の重要性を説いた。

続いて、昭和24年に研究所は天理大学の附置施設として大学に編入され、名称も「天理大学宗教文化研究所」と改められた。その際、天理教部、宗教部、伝道部、民族部が新たに設置された。そして、昭和31年の教祖70年祭を契機に、研究所は今日の「おやさと研究所」に改称されて、ラテンアメリカの宗教や文化に関する調査・研究部門が追加された。昭和35年には、ブラジルの宗教事情に詳しい中田榎彦の入所を契機にラテンアメリカ研究が進み、平成10年と平成30年には「伝道参考シリーズ」として、『コロンビアの日々—1960年～1988年—』（太田哲三著）と『新宗教のブラジル伝道』（山田政信著）が発行された。筆者は、これらの書物を参照しつつ、ラテンアメリカで天理教の最大勢力を誇るブラジルの宗教事情を明らかにすることで、海外伝道を推進するための萌芽を、本連載で見出したい。

ブラジルの宗教事情

ブラジルにはどのような宗教が存在しているのだろうか。2010年のブラジル地理統計院の調査⁽²⁾によると、宗教別の人口割合は次の通りである。カトリック教徒が65%、プロテスタントが22%、無宗教が8%、スピリチュアリズムが2%、その他のキリスト教系教派も2%を占めており、カトリックが全体の過半数を占めている。また、ユダヤ教、ヒンドゥー教、イスラム教、仏教、日系新宗教（天理教、世界救世教、生長の家、パーフェクトリバティ教団、創価学会など）、アフロ・ブラジリアン宗教が残りの1%を占めており、ブラジルにはさまざまな宗教が混在しているのである。このような宗教の多様性こそが現在のブラジル社会を形作る重要な要素であり、その多様性を追求することでブラジルの文化や伝統、価値観をより深く理解できるようになるのである。

アメリカ南部人移民とプロテスタント

そうした観点から、本連載ではアメリカ南部人移民とプロテスタントに焦点を当て、ブラジルの宗教と移民について論じる。アメリカ南部人移民とは、米国の南北戦争の終結後、南部からブラジルへ移住した人々を指し、ブラジルでは「コンフェデラドス（Confederados）」と呼ばれている。この呼称は、英語の「南部連合支持者（Confederate）」のポルトガル語訳である。1865年から1870年にかけて、約4,000人の南部人がブラジルに渡り、農業植民活動に従事した。彼らはホスト社会で、南部産の綿花やジョージア州産のスイカ、クルミの栽培を普及させ、特にプロテスタント教会とアメリカンスクールの設立に貢献した。彼らの事例を糸口として、筆者は宗教を探索する意義について検討し、本連載が海外伝道を推進する一助となることを願っている。

[注]

- (1) 出入国在留管理庁「令和5年末現在における在留外国人数について」https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00040.html（2024年10月4日閲覧）。
- (2) 独立行政法人国際協力機構「ブラジルへの日本人移住」https://www.jica.go.jp/Resource/jomm/outline/ku57pq00000lx4th-att/list_01.pdf（2024年10月4日閲覧）。
- (3) 「亜細亜文化研究所第一回所員会議に於ける訓話」『管長様御訓話集（第3巻）』天理教教義及史料集成部、1944年、77頁。
- (4) 『おやさと研究所六十年誌』天理大学おやさと研究所、2004年、5頁。
- (5) Revista franco-brasileira de geografia, <https://journals.openedition.org/confins/7785>（2024年10月4日閲覧）。

9月13日から15日にかけて標記学術大会が天理大学杣之内キャンパスを会場に開催された。13日には開会式の後、公開シンポジウム「宗教研究のインサイダーとアウトサイダー—信仰者の自己理解と宗教の学術研究をめぐる—」では、東馬場郁生人文学部宗教学科教授が趣旨説明をし、岡田正彦人文学部宗教学科教授や渡辺優東京大学大学院人文社会系研究科准教授などが登壇した。

14日及び15日には、11の部会で個人研究とパネルの発表が行われた。天理大学関係者の発表は以下の通り。

堀内みどり：翻訳とは何か—何がどのように翻訳できるのか—（パネル「“翻訳”をめぐる諸課題について—天理教を事例に—」）

尾上貴行：「異文化伝道」における「翻訳」について（同上）

中西光一：天理教ブラジル伝道と教義翻訳の実相—“教祖伝”を事例に—（同上）

加藤匡人：「みかぐらうた」の「翻訳」と身体—アサドの翻訳論の視点から—（同上）

金子 昭：宗教 2 世問題が宗教教団のあり方に訴えるもの（パネル「宗教教団の社会的責務を問う」）

澤井義次：宗教概念としての「無宗教」とその意味構造（パネル「現代日本の宗教学の諸概念とその再検討」）

澤井 真：イスラームにおける神秘主義的アイデンティティの創出

澤井治郎：教会を設置すること—初期天理教において—

森下三郎：近年の儀礼研究の展開—D. ジガラタスの儀礼論をめぐって—

山川 仁：パークリの非物質論と神学上の概念

深谷耕治：セベリア・アントンの和辻哲郎論

日沖直子：平井金三の Japanism

神田秀雄：宗教団体法による「宗教結社」統制の具体相と特質

山本佳世子：スピリチュアルケア提供者による看護師のケアのあり方の検討（パネル「何が『ケアする人』を支えるのか？」）

また、他に天理教関連の発表が三つあった。

青木 繁（東京工業大）：里親養育における宗教の社会参加—天理教を事例として—

道蔦汐里（東京工業大）：新宗教の信仰継承における教団イベントの役割—天理教を事例に—

村山元理（駒沢大）：天理教の天啓継承問題の探求—教祖存命の理と茨木事件の再考—

『近代真宗大谷派年表』には、明治九年「六・二八 教部省より、太陽暦と須弥山説との混乱なきよう達せられる」とある。一般にこの頃から、教導職による須弥山説の教示が禁止されたことになっているが、その理由や具体的な内容についてはよく知られていない。

なぜ、須弥山説の停止が通達されたのか。今回の研究報告会では、この通達の原因の一つとされる、釈雲照（一八二七—一九〇九）が起こした布教中止事件をとりあげた。小学校の教育内容を批判して島根県と全面対立した雲照は、最終的に本山と教部省を巻き込んだ騒動の果てに勸修寺の住職と教導職の立場を追われることになる。このときの議論の中心が、明治改暦以来の開明的な宇宙論／地動説と仏教の宇宙論／須弥説の対立であった。

本発表では、①島根県令や小学校教員の上申書、②釈雲照の書簡、③『明教新誌』の論説をもとにこの事件の詳細を確認し、この時期の学校教育と宗教的教化の軋轢、国体思想と仏教の緊張関係、科学的知識と宗教的信仰の差異、日本精神と西洋文化の位置関係などについて考えた。

連載執筆のねらいと執筆者紹介

「ブラジルの宗教的風景」

本連載では「宗教」と「移民」をテーマに、アメリカ南部人移民とプロテスタントに焦点を当て、知られざるブラジルの姿を解き明かしていきたい。米国の南北戦争後に南部からブラジルに移住した約 4,000 人は農業植民活動に従事し、綿花やスイカの栽培を普及させた。特に、彼らはプロテスタント教会とアメリカンスクールの設立に貢献し、筆者はその経験を通じて宗教探求の意義を考え、本連載が海外伝道の推進に寄与することを願っている。

中西光一（なかにし みつかず）

天理大学おやさと研究所講師。1986 年、ブラジル・サンパウロ州生まれ。サンパウロ大学大学院博士後期課程を修了し、博士（歴史学）を取得。天理教海外部、子ども多文化共生サポーター（兵庫県教育委員会）、近畿大学経営学部非常勤講師、天理大学国際学部非常勤講師などを経て、2024 年 4 月より現職。専門はブラジル史、近代奴隷制史。

